

広報ちゅうじん

5月1日発行
編集者：安次富

糖尿病ってどんな病気？

薬局

*今、糖尿病が増えています

日本人の 40歳以上の6人に1人、60歳以上の3人に1人が糖尿病
あるいは、その予備軍といわれています。

*糖尿病の2つのタイプ

〈1型糖尿病〉 病原体から、自分の体を守る作用が破壊されて、すい臓からインスリンを分泌できなくなるタイプです。子供や、若い人に多くみられます。

インスリンで注射を補う治療が必要です。

〈2型糖尿病〉

インスリンの量が十分でなかったり、効きにくい状態になるために起こります。主に60歳以降に多く見られますが、最近では、生活習慣の変化によって、子供も増えています。(日本人の糖尿病の95%が2型です。)

*糖尿病の主な自覚症状とは？

- ・尿の量が、増える(多尿)
- ・トイレに行く回数が増える
- ・のどが渇く(口渇)
- ・水分の摂取量が増える(多飲)
- ・体重が減少する
- ・疲れやすくなる

糖尿病は、血液検査で血糖値が標準値より高いか分かります。

*糖尿病の合併症

〈細い血管にみられる障害〉

目・・・糖尿病網膜症(視力の低下、失明の危険性もあります。)
神経・・・糖尿病神経障害(しびれ、ピリピリ感、冷たさ、熱さに鈍感になる。)

腎臓・・・糖尿病性腎障害(悪化すると、人工透析が必要になります。)
そこまで悪化した、腎臓は、もう元には、戻りません

「装具」をご存知ですか？

理学療法士 安次富 寛貴

「装具」をご存知ですか？脳卒中片麻痺の方の動かなくなった足に装着し、歩くことをサポートする「長・短下肢装具」や、強い痛みをとまなう変形性膝関節症の方の膝関節につけて痛みを軽くする「膝装具」など、様々な材質、形状からできているタイプがあります。

当院では、毎週火曜日15:00からリハビリテーション室にて、新しい装具が必要である、もしくは部分的に修正を行うことや、装具がこわれたなどの理由により再作成を要する方を対象に「装具回診」を行っています。患者様と、担当医師・理学療法士、義肢装具士で最も適した装具を選択し、約1〜2週間の装具の作製および調整期間をもって、患者様本人用装具の購入となり、その日からその装具を履いて生活をされるわけです。

とくに「長・短下肢装具」は脳卒中片麻痺患者さんに多く利用されますが、近年、脳卒中発症してからできるだけ早く頻繁に使用し、歩くことで運動機能改善の効果があがるともいわれており、当院の病棟内リハビリテーションでも積極的利用しています。また、入院時だけではなく、自宅退院されてから積極的に自宅内・外にて利用されている方も多く、長い期間使ったために壊れたり、足のサイズがあわなくなったりといった理由で装具を持ってこられる方もおられます。装具に異変を感じたらすぐに外来受診されることをお勧めします。

へ大きな血管にみられる障害」

動脈硬化を加速させ、太い血管がつまりやすくなります。

脳梗塞・・・死に至る場合や、麻痺、言語障害、めまいなど後遺症が残ります。

狭心症・・・胸が痛くなったり、動悸が起こります。

心筋梗塞・・・神経障害のため、胸の痛みを感じない場合があります。

足の壊疽・・・悪化すると潰瘍や壊疽が起こり、足を切断する場合があります。

*糖尿病の治療法

- ・食事療法・運動療法（医療スタッフに相談、指導を受ける）
- ・薬物療法（内服薬、インスリン注射）

訪問リハビリテーション

訪問リハビリテーションでは、病気やけがや老化などにより、心身に何らかの障害を持った方が、在宅における日常生活において自立し、主体性あるその方らしい生活が送れるようお手伝いしています。

★訪問リハでは以下の方を対象としています

- ① 通院などの外出が困難な方、
- ② 在宅生活上何らかの問題がある方が対象となります。

①の対象者に関しては、継続的に長期にわたってサービスを提供することもありますが、②の対象者には退院直後または在宅生活をおくられていて状態が悪化した直後に、短期間で集中的なサービスを提供します。

★訪問リハでは以下のことを目的としてサービスを提供致します

- ① 日常生活動作、日常生活関連動作（家事等）の改善
- ② 生活不活発病の防止
- ③ 家族に対する介助指導
- ④ 自主トレーニングの指導
- ⑤ 住宅の環境整備に対する助言
- ⑥ 必要な福祉用具選定に対する助言
- ⑦ 趣味活動、社会活動に対する援助

訪問リハでは利用者だけでなく、その家族に対しての支援、また身体的な支援だけでなく心理面に対する支援も行っていけるように心がけています。

★訪問リハを利用するには

介護保険を利用されている方は、担当の介護支援専門員にご相談ください。医療保険利用の方は当院玄関入ってすぐの地域連携室職員もしくは、担当相談員にご相談ください。但し訪問リハでは担当医師より訪問リハの必要性が認められた方がご利用いただけます。御了承ください。